

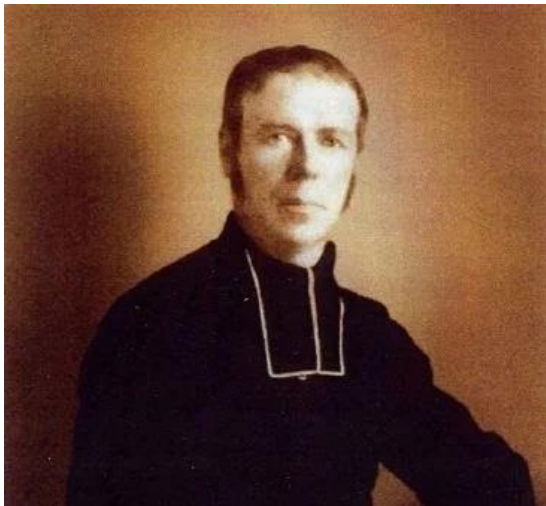
Viator

VOL.24

2019年のヴィアートル祭に寄せて

皆さん、ヴィアートル祭おめでとうございます。

兄弟姉妹の皆さん、10月21日は私たちの小教区にとって、聖ヴィアートル北白川教会の日々の宣教に喜びを与え続けている御方、すなわち私たちの保護聖人ヴィアートルのあかしを思いおこし、イエス・キリストへの信仰を強める日なのです。



2019年10月21日というかけがえのない日は、私たちの暮らしのあかしを思いおこす日であり、リヨンの読師ヴィアートルの思い出を喜びのうちに思いおこす日です。兄弟姉妹の皆さん、主のしもべとして忠実であった聖パウロにならって、私もまた皆さんがキリスト者の召命にふさわしいものとなるよう励ましたいと思います。私はこの小教区の主任司祭として、この記念すべき日に皆さんのうちに、皆さんのまわ

主任司祭・ウィリアム神父に、また皆さんの世界へと主の平和を伝えます。またこの荘厳な日にあたり、素晴らしいお知らせをお伝えします。聖ヴィアートル修道会の創立者ルイ・ケルブ神父は2019年10月2日に教皇フランシスコによって「尊者」と宣言されました。

兄弟姉妹の皆さん、この平和の気持ちを日常生活のなかであいさつを通じて伝えてください。道ですれ違う人に向かって、ともに道を歩むことを通じて、善意にあふれた無条件のまなざしによって、共感をもって注意深く相手に耳を傾け、他者が苦しんでいるときには助けとなり、心と魂のいやしをもたらす手があることを伝えてください。

最後に、ジャン・ヴァニエ*の有名な著作『共同体—ゆるしと祭りの場』から一節を引用したいと思います。「共同体とはゆるしの場です。私たちはお互いに信頼するにもかかわらず、つねに相手を傷つけることばを發したり、目立ちたがる態度をとったり、人を傷つけることに出くわすものです。そのために、ともに生きることはある種の十字架であり、絶えず努力を続けることであり、他者を受け入れることは日々お互いを許すことなのです」。

* ジャン・ヴァニエ (1928-2019)。フランス系カナダ人のカトリックの思想家。知的障がいや発達障がいなどの知的ハンディを持つ人々と持たない人々の共同体であるラルシュの創設者。

信仰の伝達

霧島彬神父（鹿児島教区）

北白川教会の皆様、ご無沙汰しております。鹿児島教区の霧島彬神父です。すでに皆様ご存じのことと思いますが、昨年12月29日（土）鹿児島カテドラル・ザビエル教会にて無事に司祭叙階の恵みを受けることができました。皆様のお祈りに感謝いたしますとともに、これからも時々私のことを思い出していただければ幸いです。司祭としての初めの数年間は特に霊的な観点からも人間的な観点からも重要な時期といわれています。皆様のお祈りによって支えてくださればと思います。現在は、まだローマの聖十字架大学教会法学の修士課程に在籍中なのでイタリア国内にいます。今年度（2019-20年度）が最終学年となりますので、来年の7月以降帰国することになると思います。

さて今回は、特にイタリアのいくつかの小教区での経験で見聞きしたことをもとに、「信仰の伝達」というテーマで思いつくことを皆様と分かち合いたいともいます。本当は司祭だからこそ語れるような内容をたくさん書ければよいのですが、この原稿を書いている時点ではまだ9か月程度の司祭職なので、叙階前に神学生として経験したことも多く含まれることになるかと思えます。

神学生時代もそうでしたが、司祭に叙階された今でも（むしろ司祭となった今だからこそ）大学の長期休暇中（クリスマス・聖週間・夏季）はローマ外の小教区で司牧のお手伝いをすることにしています。今年は聖週間と7月・8月の期間はシチリア島のパレルモ市内の聖ビアンネ小教区（地区の住民は8千人、担当の司祭は主任と助任の2人）で奉仕しました。司祭として初めての小教区体験です。私に求められた

仕事は毎日ミサをたてて、なるべく多くの時間を告解を聞く時間にあてることでした。小教区の印象としては、全体として活気のある小教区である、週日のミサにもそれなりに参列者がいる、毎週木曜日の晩に行われる聖体礼拝は特に多くの人に大事にされている、ゆるしの秘跡にあずかる人も多い（私が滞在した期間中、告解を聞かなかった日は一日もありませんでした）、ただしパレルモ市内でもかなり貧しいほうの地区なので経済的・社会的に困難な状況に置かれている信者も多い、というのが挙げられます。



写真は6月末、ルルドで。

さて、信仰の伝達という観点からこの小教区の様子をみてみると、決して楽観的な状況と

は言えません。ただしこの小教区だけの傾向というよりはイタリア全体の傾向だと思います。日本の教会と比べると信者の絶対数が多いので若い人（一応中学生や堅信をすでに受けた高校生以上の人を念頭に置いています）もある程度はいるのですが、多くの家庭では中学に入ったころから子どもたちはだんだんと主日のミサから離れていきます。そして何とか堅信までは受けてもそのあとが続かないという現象は、どの教会も頭を抱える問題となっています。

とはいえ、少なくとも小学生の段階まではある程度の組織的な信仰教育が可能な環境は整っています。この聖ヴィアンネ小教区でも他の小教区でも学年ごとあるいは2学年ごとにカテキズムのクラスが生まれ、カテキスタも知的な養成を受けたうえで主任司祭の任命を受けます。聖ヴィアンネ小教区ではパレルモ大司教区の養成講座に通うことになっており、他の教区・小教区でも、可能であれば、神学部付設の研究所 Istituto Superiore di Scienze Religiose（学士・修士の学位が得られる）で学ぶカテキスタが大勢います。また教会の規模も大きいので教材も豊富に存在します。少なくとも聖ビアンネ小教区で私が出会ったカテキスタの方々は皆信仰生活もしっかりしており、知識を教えるという側面だけでなく学んだことを祈りや実生活に生かすという側面にも気を配っており、またカテキスタ同士や主任司祭とのコミュニケーションも大切にしているという印象でした。子どもたちの信仰教育においては、各々の年齢・理解力に応じた知的な養成（その根幹は、今も昔も、信仰宣言の内容・祈りの大切さ・主日ミサの義務・ゆるしの秘跡の大切さ・十戒に代表される主要な道德テーマ）が不可欠だと思います。その意味で教会学校という環境を今述べたような仕方で充実させる

ことはこの教会であってもぜひとも目指すべきとだと思います。

とはいえ、教会学校・カテキズムで十分というわけではないことは明らかです。学んだ真理を実行するためには実生活の中で「訓練」する必要があります、そのためには周りの人の協力が不可欠です。イタリアでは学校の教科として「宗教」の授業があったり、季節ごとの宗教上の祭日・祝日に行事が催されたりして、さまざまなバックアップの形態が可能ですが、これらの機会がほぼ存在しない日本では、とにかく家庭における信仰教育・信仰の実践が特に重要でしょう。（宗教的な事柄に限らず）一般的に家庭内では他の人間関係に比べてより率直かつ効果的なコミュニケーションが可能なはずで、ですから信仰が子どもたちへと伝達されるためには、家庭全体がまずしっかりと信仰を生きる必要があります。そして家庭が信仰を生きるには、子供たちの場合と同じく、大人の理解力にあった知的養成（教義・ミサを含む秘跡についての理解・道徳的な堅固さ）と実生活での実践を目指さなければなりません。特に現代においては、秘跡の生活や道德の分野において「何をすべきか・何をすべきでないのか」について大きな混乱があります。誰も自分の知らないことを他の人に教えることはできません。まず大人（司祭・カテキスタ・親・その他子どもたちと関わりをもつ人）がこれについて確信をもって子どもたちに教えられるようにならないと、これを自らの実践によって模範として示すことも、まして子どもたちが信仰の実践から離れそうになったときに十分に手助けすることもできません。

そして以上述べたことが中学生以上、特に堅信を受けた後の高校生・大学生にも当てはまることはいうまでもありません。高校生・大学

生は知的好奇心も旺盛で、物事に熱中して大胆に取り組むことのできる時期ですので、周りの手助けがあれば、信仰においても大いに成長することができると思います。この手助けの目指すところはやはり教義・秘跡・道徳の理解の成熟と実践です。教会という場所がいつでも若者たちに開かれた場所であるためには、「青年会」や他のグループ、諸々の行事による人間的つながりが役に立つことでしょう。ただしそれらの集まりでリーダーとなる人（司祭も含む）は、その集いが真の目的を見失わずに、青年たちに学びへの意欲を植え付け、それを生きることができるようになりしっかりと励ます場となっていくように常に意識する必要があると思います。

残念ながら高校生以上のフォローアップという点では、イタリアでは聖ヴィアンネ小教区だけでなく、他の小教区でも満足のいくような体制づくりはなかなか難しいようです。要因は司祭不足、しっかりとしたリーダーの不足、青年会またはそれに類するグループ明確なヴィジョンの欠如といったところでしょうか。これはある意味、イタリアに限らず、日本を含めて世俗化した社会共通の問題かもしれません。また、とりあえず教会に来続けてもらうという短期的な成果だけでなく、将来の結婚・家庭教育のための準備（結婚式の前のいわゆる「結婚講座」の意ではなく、カトリック的結婚観および自由と責任をもって異性と付き合い結婚を決

意できるための、より長いスパンでの準備）をするという視点も、あまり明確に持たれていない印象を受けました。実際、イタリアで話を聞いた主任司祭たちによると、結婚式の申請に来るカップルの大半はすでに同棲していて、多くのカップルは子供を連れて結婚式に臨みます。司祭たちは皆このことの重大性は認識しつつも、手の付けようがないという感じでした。

否定的なことをたくさん書きましたが、希望もあります。司祭職を果たしたこの9か月の間、特に休暇中に小教区滞在している間、ミサの30分前にはなるべく御聖堂に入って、告解場に座るようにしました。わかったことは、司祭が告解場にいるのが見えれば信者は告解に来るということです。私がしたのは単に座って待つことだけですが、この小さな人間的協力に対して神様は大きな恵みの業を行ってくださるのです。「信仰の伝達」という大きなテーマについても同様のことが言えると思います。私たち一人ひとりが聖霊の助けを願いつつ、また目的と手段を常に思い出しながらそれぞれの立場でできる小さなことを毎日行えば、神様が働く環境はもう十分に整うということです。

祈りの中で、そして何よりも私のたてるミサの中で北白川教会のことを思い起こすことができるのは私にとって大きな喜びです。いつか皆様を訪ねることができるのを楽しみにしております。

二つの恵み

年を重ねるごとに、知っている方が一人、また一人とこの世を去っていく。今年は、私にとって近いとは言えないがある意味で大きな存在であった方が他界した。それは上田閑照先生だ。先生の訃報が報道された直後の主日ミサで

マリア・ヨハンナ M.M.

この教会の方々に先生のために祈っていただいたのは私としてもうれしいことだった。

上田先生は宗教哲学が専門、京都大学名誉教授であるとともに禅の老師であり、ドイツ哲学や西田幾多郎の研究で有名だが、カトリックに

とって重要なのは、中世ドイツでドミニコ会司祭であったマイスター・エックハルトの研究者であったこと。上田先生のドイツ語博士論文にはエックハルトと禅の比較が含まれていて、先生は、第二バチカン公会議後のカトリック教会にとって諸宗教対話の貴重なパートナーになった。中には批判する研究者もいたようだが、多くの研究者は好意的に受け止め、先生はヨーロッパでの会議に何度も招かれ、エックハルトとの比較などを通して西洋人の禅理解に努められた。

私はエックハルトについての修士論文の主査を上田先生にいただいた。先生の京大退官の年だった。だから、私は最後の弟子と言えるかもしれない。ただ、研究書は読んで勉強しても、若い私には近寄りたが大先生だった。おまけに、エックハルトを読み始めた頃は禅にも興味をもっていた私だったのに、どんどん違った方向に研究を進めることになり、遂には博士論文をまとめる過程でカトリックの洗礼を受けた。

上田先生も西洋人に禅を理解させることに腐心されただけではなかっただろう。会議などの機会には、公会議後の開かれた空気に加え向こうのキリスト教文化や伝統のよいものにさまざまな形で触れられたことだろう。特にカトリックの二人の研究者と親交があったようだ。ミサに参列する機会もあったことだろう。当時のことを知らない私がそう推測できるのは、2014年、ミュンヘンのカトリック・アカデミーで開催されたエックハルト協会の学会でごいっしょしたからだ。学会テーマは諸宗教対話で、上田先生が公開講演の講演者として招かれた。ミヒャエル・エンデなどの翻訳家として有名な真而子夫人もいっしょだった。88歳の先生の講演に会場の全聴衆はスタンディングオ

ベーションで応えた。学会の最終日は日曜日。主日ミサは学会の一貫として前晩に行われたので、日曜日の朝には教会の祈り（時課）があり、早起きの数名が参加した。終わってから現れたのが上田先生夫妻。その晩に実施されたサマータイムへの切り替えを知らず1時間遅れで来られたのだ。間に合わなかったことを聞いた先生夫妻は、Laudes（朝課）はこれまで参加したことがなかったのにその機会を失ったと残念がられた。上田先生は、前晩のミサでもドイツ語の聖歌に声を合わせて歌っておられた。だから、今頃、2年前に先立った奥様といっしょに、神を賛美する天使の歌声に先生独特の仕方でも声を合わせて歌っておられるかもしれない。「キリストはすべての人のために死に渡され、また、人間の究極的使命が実際にはただ一つ、すなわち神に由来するものであるからこそ、われわれは、聖霊が神に知られている方法で、復活の神秘にあずかる可能性をすべての人々に提供することを信じなければならない」（『現代世界憲章』22、改訂公式訳）。

といっても、もちろん、キリスト教に入信する必要がないということではないだろう。万年オーバードクターの私だが、キリスト者になることができたのは、日本学士院会員だった上田先生よりも「幸い」と思ったりする。

と同時に、別の恩恵も感じる。それは優れた先人がいるという恩恵だ。ドイツのエックハルト協会の学会に出かけると、私を日本人と見たドイツ人が私に親しみ深く声をかけて、上田先生の本を称賛するということが何度もあった。ヨーロッパに馴染めず苦勞する日本人もいることを考えると、私は恵まれている。

日々いろいろなことがあっても、この2つの恵みを考えると感謝するしかない。キリスト教のインカルチュレーション（文化内受肉）は何

百年もかかるプロセスだと広報部勉強会でベリーニ神父様は言われた。私もその中にあって、小さなことでもなにか役割を果たすよう招かれているのだと思う。

編集後記

先日『失敗の本質』という本を読んだ。東京電力と国が引き起こした原子力発電所の甚大な人災について分析した本である。大混乱の中で所長の吉田氏の人柄とリーダーシップに導かれ、現場の担当者は命懸けで事故を収束しようと努力したが、見えない力が人災を招いてしまった。日本人の性質とは何か、日本の組織の脆弱性はどこにあるのか。

先日、広報部勉強会で職場における「方法・手段」についての意見があった。方法や手段で物事を解決するのではなく、「本質」を大事にすべきである、という意見であったと思う。その通りだと思った。日本では問題が起こると、すぐに新しい方法・手段を作りたいがる。このような各論的な対処療法を重んじる日本社会では、マニュアルにないことが発生した時にたちまち路頭に迷ってしまう。組織を構成する人たちが普段から本質論を交わすことが重要なのだろう。

本書の最後の2ページ(エピローグ)に書かれた吉田氏の行動に心を打たれた。社会を支えるものはマネジメントとガバナンス、しかし社会を構成するのは人間である。人間を支える力を理解することが、私たちが本質を心に刻む手段であり、より良い社会をつくることにつながるのだろうと思う。今回も、素晴らしい原稿や漫画を寄稿して頂いた方々に感謝し、「Viator」が議論を交わすきっかけになれば幸いである。

(アッシジのフランシスコ M.H.)

